

海のかなた

小川未明

青空文庫

海うみに近く、昔むかしの城跡しろあとがありました。

波なみの音おとは、無心むしんに、終しゆう日岸じつぎしの岩角いわかどにぶつかつて、砕くだけて、

しぶきをあげていました。

昔むかしは、このあたりは、繁華はんかな町まちがあつて、いろいろの店みせや、り

っぱな建たて物ものがありましたのですけれど、いまは、荒あれて、さび

しい漁村ぎよそんになつていました。

春はるになると、城跡しろあとにある、桜さくらの木きに花はなが咲さきました。けれど、

この咲さいた花はなをながめて、歌うたをよんだり、詩しを作つくつたりするよう

な人ひともありませんでした。ただ、小鳥ことりがきて、のどかに花はなの咲さい

ている枝えだから枝えだに伝つたつてさえするばかりでありました。

夏なつがきても、また同じおなじでありました。静しずかな自然しぜんには、変かわりがないのです。日暮ひぐれ方がたになると、真まつ赤かに海うみのかなたが夕焼ゆうやけして、その日ひもついに暮くるのです。

いつ、どこからともなく、一人ひとりのおじいさんが、この城跡しろあとのある村むらにはいつてきました。手てに一つのバイオリンを持ちもち、脊中せなかに箱はこを負おっていました。

おじいさんは、上じょう手ずにバイオリンを鳴ならしました。そして、毎まい日にちこのあたりの村むら々むらを歩あるいて、脊せに負おっている箱はこの中なかの薬すりを、村むらの人ひとたちに売うったのであります。

こうして、おじいさんは日ひの照てる日中ひなかは村むらから、村むらへ歩あるきまし
たけれど、晚方ばんがたにはいつも、この城跡しろあとにやってきて、そこに

あつた、昔むかしの門もんの大きな礎おお石いしに、腰こしをかけました。そして、暮くれてゆく海うみの景色けしきをながめるのでありました。

「ああ、なんといい景色けしきだ。」と、おじいさんは海うみの方ほうを見みながら、ため息いきをもらしました。おじいさんは、この海うみの暮くれ方がたの景色けしきを見みることが好すきでした。

つばめはしきりに、空そらを飛とんで鳴ないています。船ふねの影かげは、黒くろく、ちようど木この葉はを浮うかべたように、濃こく青あおい波なみ間まに見みえたり、隠かくれたりします。そして、真まつ赤かに、入いり日ひの名な残ごりの地ち平へい線せんを染そめていきますが、しだいしだいに、波なみに洗あらわれるように、うすれていったのであります。

おじいさんは、ほとんど、毎まい日にちのようにここにきて、同おなじ石いし

の上に腰を下ろしました。そして、沖の暮れ方の景色に見とれて
いましたが、そのうちに、バイオリンを鳴らすのでした。

おじいさんの弾くバイオリンの音は、泣くように悲しい音をた
てるかと思うと、また笑うようにいきいきとした気持ちにさせる
のでした。その音色は、さびしい城跡に立っている木々の長い
眠りをばさましました。また、古い木に巣を造っている小鳥をば
びつくりさせました。そして、しまいには、うす青い、黄昏の
空にはかなく消えて、また低く岸を打つ波の音にさらわれて、暗
い奈落へと沈んでゆくのでした。おじいさんは、自分の鳴らす、
バイオリンの音に、自分からうつとりとして、時のたつのを忘れ
ることもありました。

夏なつの日の晩ばん方がたには、村むらの子供こどもらがおおぜい、この城跡しろあとに集あつまってきた石いしを投げなたり鬼おにごっこをしたり、また繩なわをまわしたりして遊あそんでいました。子供こどもらは、はじめのうちは、おじいさんの弾ひくバイオリンの音ねを珍めづらしいものおもに思おもつて、みんなそのまわりに集あつまつて聞きいていました。

「いい音ねがするね。」

「学が校っこうのオルガンよりか、この音ねのほうがいいね。」

子供こどもらは、たがいに、こんなことをいいあつていました。

おじいさんは、あるときは、子供こどもらを相手あいてにいろいろな話はなしもしました。しかしみんなは、おじいさんの弾ひくバイオリンの音ねに慣なれ、またおじいさんはなしの話はなしにも聞きき飽あきると、いままでのように、

おじいさんのまわりには寄つてきませんでした。

「葉売りのおじいさんが、また、あすこで鳴らしているよ。」

と、一人の子供がいうと、

「稽古をしているのだよ。」と、他の一人の子供がいました。

「稽古でない、海の景色がいいから、見てうたっているのだよ。」

「そうでない、ねえ、稽古だねえ。」

子供らはいろんなことをいつて、議論をしましたが、また、そ

んなことは忘れてしまつて、みんなは遊びに夢中になりました。

ひとり、松蔵という少年が、この中におりました。この

少年の家は、貧乏でありました。彼は、他の子供らが騒い

だり、駆けたりして遊んでいましたのに、ひとり、おじいさんの

そばへきて、熱心ねっしんにバイオリンの音ねを聞いて、感心かんしんしていました。

いつしか、おじいさんと、この少年しょうねんとは仲なかよくなりました。「どうして、こんないい音ねが出るのでしょうね。」と、松蔵まつぞうは、不思議ふしぎそうにおじいさんに向むかってたずねました。

「坊ぼうは、音楽おんがくが好きとみえるな。」と、人ひとのよいおじいさんは、少年しょうねんの顔かおを見みながら、笑わらつていいました。

「聞きいていると、ひとりでに涙なみだが出てくるの……。」
 「ははは、坊ぼうも、私わたしのお弟子でしになってバイオリンが弾ひきたいかな。」と、おじいさんはいいました。

「おじいさん、どうか僕ぼくに、バイオリンを教おしえてください。」と、

少年は、熱心に、目を輝かして頼みました。

それから、おじいさんは、自分のバイオリンを少年に貸して、弾く方法を教えてやりました。

松蔵は、おじいさんから、バイオリンを教わることをどんなにうれしく思ったでしょう。そして、毎日、日暮れ方になると、城跡にいつて、いつもおじいさんの腰かける石のそばに立つて、おじいさんのくるのを待っていました。

「なかなかよく弾けるようになった。」といって、おじいさんは、松蔵の頭をなでてくれることもありました。

夏も、もはや逝くころでありました。おじいさんは、ある日のこと、松蔵に向かつて、

「坊や、おじいさんは、もう帰らなければならぬ。こんど、いつまた坊にあわれるかわからない。坊は、きつと上手なバイオリンの弾き手になるだろう。私のかたみに、このバイオリンを坊に置いてゆく。坊は、このバイオリンで私がいなくなってもよく、稽古をしたがよい。」といつて、バイオリンを松蔵にくれました。

少年は、どんなに喜んでありましよう。また、おじいさんに別れなければならぬのを、どんなに悲しく思つたでありましよう。

おじいさんは、船に乗つて、遠く、遠くいつてしまいました。少年は、おじいさんの故郷を知らなかつたのです。ただ、

このとき、海の上を望んで悲しんでいました。おじいさんを乗せた船は、夕焼けのする、紅い海のかなたに消えてゆきました。少年年は、果てしない、その方を見やって、ただ悲しみのために泣いていました。

毎日、入り日は、紅く海の上を彩りました。そして、城跡から、海をながめるその景色に変わりはなかったけれど、おじいさんの姿は、もはや、どこにも見るできませんでした。

少年年は、おじいさんが、腰かけた石のところをやつてきました。ありありとおじいさんが、いつものように、小さな箱を脊中に負つて、バイオリンを持って、石に腰をかけている姿が見えたのです。

「おじいさん！」

少年しょうねんは、こう呼びよました。しかし、応こたえはありませんでした。

彼かれは、自分じぶんの手てに、いまおじいさんの持もっていたバイオリンのあるのに、はじめて気きづきました。そして、おじいさんは、海うみのかなたへいつてしまったのだと知しって、かぎりなく悲かなしかったのです。

彼かれは、その石いしに腰こしをかけました。また小ちいさな姿すがたで、その石いしの上うへに立たちました。そうして沖おきの方ほうを向むいて、おじいさんから教おしえてもらったバイオリンを弾ひくのでした。

少年しょうねんは、おじいさんのことを思おもうと、胸むねがいつぱいになり

ました。いつしか自分の弾ひいているバイオリンの音ねは、悲かなしい響ひびきをたてていたのでした。

海鳥うみどりは、しきりに鳴ないています。頭あたまの上うえの松まつの木きを渡わたる風かぜの音おとまで、バイオリンの音ねに心こころをとめて、しのび足あしして過すぐるようおもに思おもわれました。

いつしか、村むらの子供こどもらまで、松蔵まつぞうの弾ひくバイオリンの音ねを、感かん心しんして聞きくようになりました。

松蔵まつぞうは、おじいさんがいなくなっても毎まい日にちのように、城しろあ跡との石いしのところとにきて、おじいさんがしたように、沖おきの方ほうをながめながら、熱ねっしん心しんにバイオリンの稽古けいこをしたのであります。

けれど、ここに思おもいがけない不幸ふこうなことがもちあがりました。

まつぞう
松蔵の家が、貧乏のために、いっさいの道具を競売に
付せられたことであります。もとよりなにひとつめぼしいものが
なかつたうちに、バイオリンが目立ちましたのですから、この松
蔵にとつてはなによりも大事な楽器を奪い去られてしまいました
た。そして、バイオリンは他のがらくたといっしよに車につけて、
どこへか運び去られました。

くるま
車が、でこぼこの道をゆきますと轍がおどつて、そのたびにバ
イオリンは車の上から悲しいうなり音をたてたのであります。
まつぞう
松蔵は、目に、いっぱいの涙をためて車の行方を見送つてい
ました。しかしそれをどうすることもできなかつたのです。

こののちは、自分が、できるだけ働いて、自分の力でそれを取

り返すよりは、ほかに途がないことを感じました。

まつぞう 松蔵は、あの忘れがたいおじいさんのかたみである、そして、

自分の大事なバイオリンを取り返すためには、どんな苦勞をもい

とわないと決心しました。それから、松蔵は、小さな体で堪

えるだけの仕事はなんでもしました。工場にいつても働けば、家

にいても働き、また、他人の家へ雇われていつても働きました。

寒い冬の夜も、また、暑い夏の日盛りもいとわずに働きました。

そして、自分の家のために尽くしました。また、もう一度、失つ

たバイオリンを自分の手に買いもどして、それを弾きたいという

望みばかりでありました。

けれど、あのバイオリンが、はたして、自分の手にもどつてく

るか、どうかということとは、まったくわかりませんでした。もしかだれか、知らぬ人の手に渡つてしまつて、ふたたび自分の手に返るようなことはないと考えましたときは、彼は、どんなに悲しみ、もだえたでありますよう。

けれど、あのバイオリンは、きつと、いつか自分の手にもどつてくるにちがいないと信じますと、また、彼の瞳は、希望の光に輝いたのであります。

三年の後、彼はとうとうバイオリンを、買ひもどすだけの金を持つことができました。

「これから、自分は、バイオリンを探して旅立ちしよう。」
 松蔵は、城跡の石のところに来ました。そして、海の方を

ながめて、祈いのりました。

「どうか、あのなつかしいバイオリンが、私わたしの手にもどつてきま
すように。」と、祈いのりました。

空そらを鳴なきながら飛とんでいるつばめは、彼かれのいうことを聞ききまし
た。そして、この憐あわれな少しょう年ねんに同どう情じょうするごとく、くびを
傾かたむけてながめていました。

少しょう年ねんは、両りょう親しんや、姉しまい妹わかに別わかれを告つげました。

「私わたしは、旅たびをして、りっぱな音おん楽がく家かになつて帰かえります。」
そういつて、彼かれは、故こき郷やうを立たち出でたのです。

それから、彼かれは、あちらの町まち、こちらの町まちとさまよつて、バイ
オリンを探さがして歩あるきました。

また、バイオリンを弾く家の前に立っては、じつとその音に耳を傾けました。弾いている人にどれほどの技倆があるう。弾いているバイオリンは、なつかしい自分のものであったバイオリンではなからうか？ と、かたときも自分の志と、バイオリンのことを忘れませんでした。

少年は、おじいさんのしたように、薬売りになつたり、筆や、墨を売る行商人になつたりして、旅をつづけました。ただ一つ、そのおじいさんの持つていたバイオリンにめぐりあうのに、頼みとするのは、小さな星のような真珠が、握り手のところにはいつていたことです。少年は、ふるさとに近い町の道具屋は一軒のこらずにきいて歩きました。

「真珠しんじゆの小さな珠ちいが、握り手にぎにはいつているバイオリンは出までせんでしたか？」

どこかこの近くちかの古道具屋ふるどうぐやに、そのバイオリンは売うられたと思おもつたからです。そして、まだ、その店みせのすみに残のこつていやしないかというかすかな望のぞみがあつたからであります。

すると、一軒いっけんの道具屋どうぐやは、いいました。

「なんでも、そんなバイオリンを三年ねんばかり前まえに買かつたことがあります。店みせにかけておくところある日ひ、旅たびの人が前まえを通りかかつて、そのバイオリンを見てみ、ほめて買かつてゆきました。どこの人ひとともわかりませんが、なまりで西にしの方ほうの国くにの生まれだということはおわかりました。もう、そのバイオリンはどこへいったかわかるもの

でありません。」

松蔵まつぞうは、そう聞くと、がっかりしました。

「その人は、どちらへいったでしょうか。」といって、ため息いきをつきました。

道具屋どうぐやの主人しゅじんは、笑わらいました。

「なんで、そんなことがわかるものですか。しかし、いまごろは、あの買った人かひとも、またどこかの古道具屋ふるどうぐやへ売うつてしまったかもしれません。あなたが、そんなにほしいものなら、幾年いくねんもかかって探さがしてみなさるのですね。しかし、そんなことはむだなことかもしれません。」と、主人しゅじんはいいました。

「私わたしには、あのバイオリンでなければ、けっして出でない音ねがあり

ます。命いのちをかけても探さがさなければなりません。もしあのバイオリンが見みつからなかつたら私わたしは、もう生いきているかいもないのです。
。「と、少しょうねん年はいいました。

これを聞きくと、主人しゅじんは、目めを円まるくしてびつくりしました。

「あなたが、そんなに熱ねつしん心しんなら、きつと見みつかるときがあるでしょう。」といいました。

少しょうねん年は、その言葉ことばに勇ゆう気きづけられました。そして、あてなき旅たびをつづけたのであります。

その後ご、幾いく十じゅうたび、幾いく百ひゃくたび、いろいろな古ふるい道具どうぐを売うる店みせにはいつて、バイオリンを聞きいたでしょう。また、あるときは、風かぜの絶たえ間まにどこからか聞きこえてくるバイオリンの音ねいろ色いろに耳みみを傾かたむけ

て、もしや、だれか自分の持つていたバイオリンを弾いているのではないかと思ったりしました。

そのバイオリンの音は、じつにいい音色でした。そして、それを弾いている人は、けっして下手ではありませんでした。けれど、彼は、自分のおじいさんからもらった、バイオリンには、けっして、他のバイオリンにはない、音色の出ることを感じていました。

「あのバイオリンじゃない。」

彼は、がっかりしました。

明るる日も、また明るる日も、少年は、旅をつづけたのであります。

春の日の雨 催しのする暖かな晩方でありました。少年

年^んは、疲^{つか}れた足^{あし}を引きずりながら、ある古^{ふる}びた町^{まち}の中^{なか}にはいつてきました。

その町^{まち}には、昔^{むかし}からの染^{そめ}物^{もの}屋^やがあり、また呉^ご服^{ふく}屋^や、金^{かな}物^{もの}屋^やなどがありました。日^ひは、西^{にし}に入りかかっていたいました。少^{しょう}年^{ねん}は、あちらの空^{そら}のうす黄^き色^{いろ}く、ほんのり^{いろ}と色^{いろ}づいたのが悲^{かな}し^しかったです。

雨^{あめ}になるせいか、つばめが、町^{まち}の屋^や根^ねを低^{ひく}く飛^とんでいました。このとき、少^{しょう}年^{ねん}は、疲^{つか}れた足^{あし}を引きずりながら、まだ家^{いえ}の内^{うち}には、燈^{とも}火^{しび}もついていない、むさくるしい傍^{かたえ}の軒^{のき}の低^{ひく}い家^{いえ}の前^{まえ}にさしかかりますと、つばめが三^ぱ羽^う、家^{いえ}の内^{うち}から、外^{そと}の往^{おう}来^{らい}に飛^とび出^だしました。それと同時^{どうじ}に、ブーンといって、バイオリンの

糸いとの鳴り音な おとがきこえたのであります。

少年しょうねんは、はつと心こころに思おもいました。なぜならその音色ねいろは、きき覚えおぼのあるなつかしい音色ねいろでありましたからです。

もうすこしのことことに、氣きづかずに通り過とぎようとししましたのを、彼は立たち寄よつて、その古道具屋ふるどうぐやをのぞいてみました。それは、つばめが、止とまっています、飛とび立たつときに、その糸いとを鳴ならしたとみえます。そこには、バイオリンが一ちようすすけた天てんじようからつるされていきました。彼は、よく見みると、それに小ちいさな光ひかる星ほしのような、真珠しんじゆがはいっていたのでした。

「あ！」と、声こゑをたてて、少年しょうねんは、喜よろこびに、狂くるわんばかりで
 ありました。そしてさつそく、このバイオリンを買かつて、自じ分の

腕うでに奪うばうように抱いだきました。まさしく、三年前ねぜんに失なくしたおじいさんのくれたバイオリンでありました。

黄昏たそがれ方の空そらに、つばめはなっています。そのつばめの鳴なく声こえは故郷こきようの海岸かいがんの岩鼻いわはなでなくつばめの声こえを思おもわせました。

「ああ、つばめが、私わたしに、教おしえてくれたのだ。」と、うす明あかりの下したで、バイオリンを抱いだいて少年しょうねんは、つばめの飛とんでゆく北きたの空そらをながめていました。

松蔵まつぞうは、唄うたうたいとなりました。かつて、おじいさんがそうであつたように、脊中せなかに、小ちいさな薬箱くすりばこを負おつて、バイオリンを弾ひきながら、知しらぬ他国たこくを旅たびして歩あるいたのです。

入り日いひは、赤あかく、海うみのかなたに沈しずみました。彼かれは、その入り日いひ

を見るにつけて、おじいさんのことを思わずにいられませんでした。旅するうちに、幾たびか月日はたちました。松蔵は、青年となつたのです。けれど、彼は、どうかして一度、海を渡つて、あちらにある国にいつてみたいという希望を捨てませんでした。

ある年の初夏のころ、彼は、ついに海を渡つて、あちらにあつた大島に上陸しました。

そこには、いまいろいろの花が、盛りと咲いていました。

彼はその島の町や、村でやはり薬の箱を負つて、バイオリンを鳴らして、毎日のように歩いたのです。こんど、彼は、おじいさんを探ねなければなりませんでした。

彼かれが、バイオリンを鳴ならしながら道みちを歩あるくと、村むらの子供こどもたちが、男おとことなく、女おんなとなく、みんな彼かれの身みのまわりに集あつまってきました。

「ああ、この人ひとだ。この人ひとだ。」

「私わたしに、どうかバイオリンを教おしえてください。」

「わたしにも……。」

子供こどもらが、こういつて、口くちぐち々に頼たのみましたばかりでなく、親おやたちまで家いえの外そとに出て、松まつ蔵ぞうをながめていました。

「どうしたことか？」と、彼かれは、不思議ふしぎに思おもいました。すると、ひとり一人ひとりの子供こどもが、

「私わたしたちのおじいさんが、死しになさる前まえに、もし真しん珠じゆの星ほしのほしかったバイオリンを弾ひいてきた人ひとがあつたら、第二だいの私わたしだと思おもつ

て、その人^{ひと}から、バイオリンを教^{おし}えてもらえといわれたのです。」
といました。

彼^{かれ}は、このことを聞^きくのがつかりしました。なつかしいおじい
さんに、もう永^{えいきゆう}久^{きゆう}にあうことができなかつたからです。それ
から彼^{かれ}は、花^{はな}の咲^さき、ちようの飛^とぶ中^{なか}で、みんなに音^{おん}楽^{がく}を教^{おし}え
てやりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「週刊朝日」

1924（大正13）年1月

※表題は底本では、「海《うみ》のかなた」となっています。

※初出時の表題は「海の彼方」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海のかなた

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>